

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

3月10日に英国のチャルトナムで行われたハーダル2マイル路線の最高峰であるG1チャンピオンハーダル(芝16F 87y)で、牝馬としてはレース史上5頭目の優勝を果たしたエバトン(牝6、父ノーリスケットオール)が、今回のこのコラムの主役である。

現在の欧州ハーダル界には、3頭のスター牝馬がいる。このうち、入障以来無敗の7連勝中で、ここに直近2走は牡馬相手のG1を完勝していたハーダルサックル(牝6、父スマラニ)と、今季初戦となつたG2ギャルモイハーダル(芝24F)で牡馬相手に21馬身差の圧勝劇を演じたベニアデュ(牝9、父グレートブリテンダ)は、チャルトナムと同じ10日に行われた牝馬限定のG1メアズハーダル(芝19F 2000y)に出走。1着ハーダルサックル、2着ベニアデュで決している。

そんな中、20Fは適性距離よりやや長いこともあり、敢然とG1チャンピオンハーダルに挑んだのがエバトンだった。

仏国産馬で、7歳年上の半姉にLRメアズノーヴィスハーダルフィナーレ(芝20F 118y)勝ち馬タインテシングがいるエバトン。父ノーリスクアットオールは現役時代、平地でG3ラクープ賞(芝2000m)など2重賞を制した他、G1イスバーン賞(芝1850m)3着などの実績を残した馬だった。

祖国でナショナルハントフラットを3戦し、G1ジャックドウヴィーヌ賞(芝2500m)を含む2勝を挙げた後、障害界の大馬主の一人であるJ.P.マクマナス氏が購入し、英國の伯楽ニッキー・ハンダーリング厩舎に転厩。ハーダルとしてデビューしたのは18年11月だった。ケンブリッジセーターの条件戦を連勝した同馬は、19年のチャルトナムフェスティヴァルに組まれていたG1メアズノーヴィスハーダル(芝16F 179y)に参戦。中団追走から徐々に押し上げる競馬を見せたが、最終障害の手前でスタミナが切れて失速。勝ち馬から9.3馬身差の9着に大敗した。

だが、これが彼女がここまでハーダルで経験した、唯一の黒星となった。19/20年シーズンは、11月30日にニヨーバリードで行われたLRインターメディエイトハーダル(芝16F 69y)で始動。これを6馬身差で快勝すると、ヘンダーソン師が次走に選択したのが、12月26日にケンブリッジで行われたG1クリスマスハーダル(芝16F)で、エバトンはここも5馬身差で制してハーダル重賞初制覇をG1で成し遂げたのだった。

今季のハーダル2マイル路線は、19年のG1チャンピオンハーダルを15馬身差というレース史上最大着差で制したエスピボワールダレンが、今季開幕前の調教中に大怪我を負って急逝。17年・18年と連覇

しているチャンピオンハーダルを含め、8つのG1を制しているブーケールデール(騙9、父クリヨン)が、今季初戦となつたG1ファイティングファイブスハーダル(芝16F 46y)のレース中に外傷を負い、残りのシーズンを全休。なおかつ、前述したように有力牝馬3頭のうち2頭が牝馬限定G1に廻ったため、20年のチャンピオンハーダルはいささか手薄な顔触れとなつた。

そんな中、オッズ3倍の1番人気に推されたのがエバトンで、中団で競馬を進めた同馬が最終障害を飛越したところで先頭に立ち、そこから後続を3馬身突き放して優勝。この路線のG1・3勝馬シャージャー(騙7、父ドクター・ディーノ、17倍の8番人気)が後方から追い込み2着。前走G1愛チャンピオンハーダル(芝16F)はハーダルサックルの2着だったダーヴィー・スター(騙8、父カブニシ、9.5倍の3番人気)が3着。前走ゴウランパークのG3トライアルハーダル(芝16E)で4度目の重賞制覇を果たしての参戦だったシーロスエメリー(騙8、父カリフエ、8倍の2番人気)が4着という結果となつた。

エバトンは来季も現役に留まり、G1チ

ヤンピオンハーダル連覇に挑む予定。ブックメーカー各社の前売りでは、オッズ4.6倍の1番人気に推されている。